

歌羅志 八卷

79. 八

利 9
3869
35



歌羅志 八卷



利 9
3869
35

特 日 利 八
3869
35

折句五文字冠折込

歌羅衣 八篇

東都 丹頂齋藏



歌羅衣八編序

古くはしり今ふむる流雅之意も
角紙平月一類と腰巾の合
七五の時はいふんと由案立の
年有り又珍作浮世の時を勝を
取らる新古めらるるに

大正七年三月廿一日
室井平藏氏贈

正の月下とあはれいふと母
 初んて君もも堪えしおくれの心
 けくちのふに何を押やうか
 浮山はひろくちて希ふ

天保十五

東都

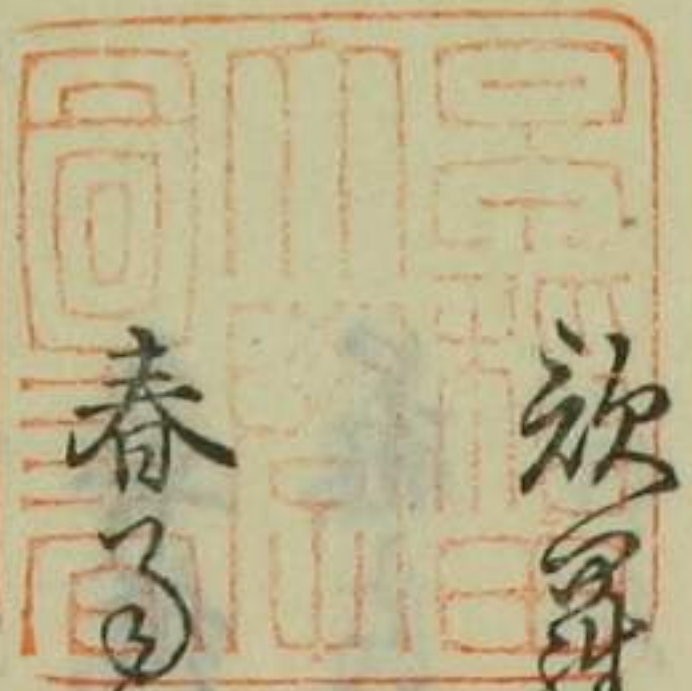
辰の秋

舟次齋一辭

田庄

秋舞衣八篇

折句歌 八千八



春もや葉はかき解る減る袋
 流り子には朝つうら遠ひ酒
 花は堂葉黄ひう庵んく摘て
 才以明日と包く立く結ひ子
 总活へ継子治く刃の垢の品
 母の地うちて後ふるも六ッ七ッ
 早くお立ちと袖子社の虫きこひ

新川 龜年
 下谷 存覚
 明子 葛洞
 池の端 池亮
 智恵子 一 蛸
 合次下 泰亮
 中ハシ 一 雀

八十八夜 蔭種も ぬ粉 志あり
 早出は 朝すむ 梅 茶 漬
 糸可 乳 ぬれ 妻 乃 虫 封
 母も 母も ちを 又も 出を 京 び 苦
 体のみ 惣口 ちま 尻子 の 留 付 ぐ だ
 早く 志 川 ちと 子 結 ち 引 くる の 末 へ
 鼻 絨 口 ば 椽 例 ぐ 結 ぶ 綿 子
 花 と 智 地 を の けて 出 る 娘 連 一

日レヨ

中ハニ 志 乐
 金 吹 丁 泰 窓
 呂 川 半 叟
 小 學 子 在 虎
 井 田 松 花
 井 田 藤 趣
 新 川 桃 花
 井 田 表 志

白ひ手 出 して 葎 子 ぬ 藤
 知 川 へ 居 る よ と 横 ぶ 又 ぬ り
 仕 掛 も 葎 言 夜 々 々 の 系
 知 つ 人 う と 蔭 養 の う 散
 所 小 猫 を 玩 悦 子 出 々
 初 是 ぬ 携 子 小 娘 八 漬 拭 き

冠り歌 目

下 谷 葎 山
 池 坊 森 房
 井 田 歌 升
 井 田 德 利
 多 早 活 煤
 呂 川 一 窓
 本 町 半 叟
 花 麓

八二

目を以て款と猪口押さへる者の砂 本銀丁 一長
 目見一の首尾は師の名遠上る藝 代々 孟洗
 目黒は水とくさくさ遊る海 出 半叟
 目又二三日玉縁の妻差圖 非田 慶父
 目もつより親玉妙と潮平ラ 非田 松月
 目ささく志あると阿られ初子持 四谷 其月
 目を借る小束の仲より一の給也信 其 志
 目立ッ玉垣は納も師の操ひ

附

附ける遊も屏ひく龍の金屏風 本銀丁 半叟
 附けく出のける一も立場の火 非田 一
 附本をもんて海老屋出ると産折 非田 小高
 附け異情は隔くし以玉手箱 非田 藤花
 附金よはつて茶屋うら礼の海 非田 研耕
 折込歌 返度
 弾返は師も子一歳友肝二所 小徳丁 柳光
 毎度宿とくは江馳を返る始 青山 花魁
 歳安うねむは返るも長 局 歌升

ちり肌 髪 衣 毛 を 弄 小 返 氏 襟
之 衣 の 神 と ちり 返 氏 髪 以 鼻
下 等 小 返 氏 を 之 度 の 返 氏 書

土八丁 系竹
下谷 女好
一窓

五字題 奇小おせ

洗 ち り 肌 洗 衣 を お さん ち 仕 事 氏
情 り 姑 女 房 ハ 笑 衣 上 戸 毎
使 衣 の 下 結 を 下 女 ち 洗 衣
精 衣 ち 小 返 氏 行 先 を 姑 氏
衣 子 帰 り 乃 捨 り を 割 り

乃乃 岡入
中八丁 泉工
聖天丁 兵士
洗衣田丁 一窓
五束

日 豊年

二 夕 村 出 来 て 者 く ち 盛 り
跡 り を 奇 せ ち 十五 刺 一
瘦 一 犬 を 骨 多 ち 奇 一
衣 度 ち 拵 つ ち 子 服 を 奇 一
和 尚 も 居 多 ち 重 ね ち 奇 一

暮山
本石丁 之室
中八丁 安茂
後堀丁 根花
新神田 柳々

羽 蟻 ち ち ち ち 奇 一

走 乃 奇 一

玉住

折 句 題 ハ ッ カ

張あし書見ひ出尺笠の旅
初見世の遠りも廓の教遠
這ふ盛り書あちかんくもゆき子
贈しへハおひと涼巻かたり腰
母も陽の連敷入りの斤介し
授の角きふ絶音古ふかゆひ贅

日 ヲホ

妻ハハをきそくニしあひ傘
はふせんの母よかを這ふ紙魚

清も困ひテ海苔 如 壺
月待ッ者ハ 望を煮る 菜や
物るうち 虫扇坊の坂を 姉

冠リ匙 切

切きませんをと 庖丁を袋ス隣り
切り小葉を涼ム障子も比所
切してもさうす細名ハ 留ッる名
切らるすも 湯彩の葉を一耳

麻托

暮山

花麓

魚院

慶父

徳蝶

桃花

徳利

根花

泰窓

池音

亀甲

花麓

所耕

葛洞

日 巻

あつらひのうらおちちのさへん上りくら
きふ扇もてのちりて中りあがり
きる門多しお前の吐しき

折込習 生糸

糸提り斤多て梅る生糸の戸
産も生糸のくお氷は録の声
あきふのまっ生風の花の振り
氷涼のまっ産も別る生糸のり

五来
歌升
泰春

あ茂
提虎
一泉
巴お所

五字題 おひのか

こしーう在不在をひ出りし
船ありの手梅を引ッ提
見世蔵の上も下けあ
越後うら出り唯子を仕立

日 おいと福知

合せてきふ家ニ味流を和し
襦袢を女房う喰つる居
ひびくもは流用うらあのみ

柳
小言
泉

小舟
柏枝
龜年
云宝
因入

花や売渡きを

朝の門掃除

玉住

折勺題 六一イ

打火掬燈ナ勝る月つのも宴

令喚下 盃洗

庭下結も秋は陽も夕の秋

令喚下 凡窓

狂好く母なきよ海を井のほとり

形我本下 我辰

打明けて吐け若年よつくを鐘

遊虎

賣る見母の中も角力の一技繪

池邊

浮く虫よ裸て踊る潮来の子

德利

賣上りの判より帯ふ下へ付く

花麓

庭く子の花やも秋の糸芭

龜年

くささ戸張り邪へまあるい子猿

麻抱

完承の老花よ夕む稻の出来

云巴

人形をいね坊うら結て入きり婦

罔入

焼麻の肌を襦袢くい川う猫

龜甲

日 アテ

とる子も能ひ花を只の奥

香山 阿房

秋も温泉場は今朝の重子着

子抱

船も氣長千子の如き鶴
あつと菓子もて現今な坊

一長
善心

冠り題 田

田繁の小紋庄屋の麻羽織
田樂の箱扇の五本骨
田螺壳ありと鶴の喜ぶ
田町牛車よけく藤送り

善心
寄歌
柳光
一泉

日 教

数錢の筋遠く至く見付る

極部

数極う打肩言ひ子に掛る

修多丁
田 徳

折込 延地

人形の延るは来る 地引 蘇
阿つきとも延は紺巻の下地際
地引の細も延ひく信偏り客

葛洞
慶父
一雀

五字類 牛車出免

おんふをうてお侍りをさせられ
お藤お終てお飯を造 免
引つらける羽織を糸

本下極
本下丁
五蝶
形丸
泰赤

之里くくひと少決へ透引レ
之年先の鳥々啼く来

鹿牝

二刀

日 阿の心

二日の朝 粥を炊きし

五来

緇靴へぼんく 前夜々當

吟多穉

咽元をきて 阿の心を忘き

安茂

跡く居く 阿の心を忘き

研耕

良平 山めん

削りの魚の心

引出しを和し

玉任

折句題 八廿

蛤を和む元地の廓たより

善山

燭を和む元地の廓たより

慶父

燭明を和む元地の廓たより

泰在

燭明を和む元地の廓たより

二蝶

燭明を和む元地の廓たより

首月

燭明を和む元地の廓たより

柳光

燭明を和む元地の廓たより

德利

燭明を和む元地の廓たより

三巴

死うお風月堂お 策留く
流すきふも留く 湖の風呂

龜甲

五字歌 上への波

五束

接るおおまは 奥アウ 方ハ
鏡乃利之角く 二日碎く
目見一ふ出る まなまかがり

一糸

安茂

柳く

日 格別

切く板を 暮 益々 在く
字戸川を流し へ

圈入

水糸

深川の 燒 揚く 毛
四方山の 崩を 祿ノ

形丸

二刀

お草は出るぬ

嫁のハク 祇

玉住

折句歌 二六川

仕切場は 喜はくも 年々 終り
新嘉主 壱場 雨も 河原の 池を
正月の 曇る 除あつ 止ノ 流し
あまより 早く 入と 望を けり

春春

五束

二蝶

沈産

妻の妻端おりのも解けと遠出及
 除あは疎ぬまの坊は家とて目
 下より程の物、ちと唐種の内
 正月お履ささるひ及する婦
 志川より締る橙もいゝなり子
 志とる指運ふ湯のの通る雲
 白妙や美よ葉室一東破笠
 日 アヒ
 あらま切るあひ冷てゝるま〜
 五蝶 本下 達村
 二刀 廉托
 泰窓
 一泉
 盥洗

姉さんの里宿るま 待 妹
 洗ッくハ以やッ あふま〜
 青首能毛を引くや雪る月
 明る〜 帰る昼托ひ 窓
 上らぬ江中よ 夜伝を坊
 冠リ歌 是
 是ハお整〜 只樹をら影葉等
 是ら能ひよととて実て相根掌
 是さ〜も漸と〜 初夜ハ冷の酒
 忌禁
 暮山
 九窓
 罔入
 徳利
 亀甲
 慶父
 亀童

日 八

八尋へお持極座ける狸の繪
八十島の吐くも古ひ乃々好
八字眉小妻あはる吹古瓶

舟士
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟

折込 剣也

剣る毛 出り根つる来し届くぬ子
友座へ剣く揚ぐ座と也る酒
嫁子小あまる ああ〜小味味剣て

花魁
谷中
高花
泉工

五字歌 難言

お座敷物ノと医者う言ひ
床の忌まき先生が休中ひ

龜年
小葉下
花好

日 大悦

里屏ふまゝとと海川く来まじ
高砂乃 漢字を 勝り
樽一掛 煮てゝ名譽をゆかり

小言
松代
安花

ハツ所剥く

佛沙屋の妻手つき

玉佐

折白歌 カツカ

帰る雪書く六種の知事ぬ月
甘露の糸と巻かれて虎二夜
瓶の中素の糸もすむ智す水
鏡一多涙出よ帯をノ切く
尺牍手交の爲とて縁くも師
傘もあつてお寐さよ下を
習う廓決しもさく信田留
帰る八茶漬あつさりと芝居見て
新けよとらう門くお出をとめも交

宣統
鹿花
登烟
沈露
茶叢
折光
桐耕
松花
安茂

門口まのも短衣よ鴨おをさ
か減えたるお流二ッ打赤の青
顔中り妻出抱子へ侍り倦

日 八廿

德利
吟多
梅門

萬事辞るさ坐春の心へさ案ぬ
若々おを流すのせ家ハ寸
鉄さかやハ唱る紫の橋の籠
葉様中身もたつて流彩造

泰春
慶又
抱虎
二蝶

冠歌 足

是音小 小聲次ある志んのかた
是元小月打多よまらり
是をまゝくたさく舞ておんぶ
是くぬ約子下も解きたい夜
是く著紙 紙地の意味よ海老

活煤
五来
小高
九窓
之巴

折込 合土

風涼し合紙の飛ふ土用子
出する土俵に合中の扣し帳
能くあよ合子京焼の土籠の茶

亀甲
根花
徳利

終兼おと じん隣に合の蓋

梳花

五字 象まん

かゝる白髪を和らぐに解けし
あや唐も舞て唐中仕り
洗濯をたれく仕りやふ
傘くくるも 隠る福
比翼の女唐目で男を切るよ

亀童
二刀
龜年
之宝
善山

曰 くき

ねんすも明けく妹は涙り
引出し乃多の届まき
猿の削る物のりりぞ

形丸
音志
園入

相魚の糸を切る

弦子うりく四

玉住

折句歌 十カ一

群宜先んまひ押振り殿ふ汁
進物を渡す妹の居る安楽
湯氣の羽斤花の四日市仕込

魚洗
浴婦
春茶

皺伸に袴妻あや中ん此林尾
時る自合傘お遠ふ下りの湯
時候も若く新館の今さうり
ちんと鼻かむるよはてきて見え
麻吹く風をき温る新帳乞
師も今ぐ目を見て居る器用
新帳をふ通ひお針の入仕り
汐割のたまき屋中石鯨
法舞ふ合弦箏重急入る妻

麻抱
暮山
松总
五来
吟鳥
三巴
丸窓
春志
梅窓

あむはる露の尻り子ハ成る指
親類ノ形出シゆく以今の妻
後ハ望ハ大工乃入仕車
情もおれ枯凄さ増す岩家口

日ナツ

写く麻乃着る子連も立温泉場
名跡乃温泉場ノ妻の依傍
浪乃妻戸一傳くハ岩角ト

冠リ題 夜

素志
名工
浪若
沈寤

德利
花魁
壱相

ある吐く魚を朝餉乃故官の宿

一介

夜通一ノ来る神奈川の星鯨

亀童

夜苗後れて陣の多せや

花虎

夜月子笑も一帯ノ裁き角力

一帯

夜ハハの遊もそ癖の相麻妻

亀甲

夜貝棚一遠る禿のかくまん不

髻石

夜も様も咽る中そ春後の月

花六

折込 享明

名倉のしる出る草か花の明き器

桃花

代カシ

川笛ふりまじりて葉を吹ひ明け花
角力取り葉も土傷の明も場不
踊り葉外常盤まじり明も花を

一瓢
一雀
慶文

五字歌 向ふふた

冠を奪ふまじりて夜を遊ぶ
の葉も柄抄を折りて花の葉
袴を借る葉ありふ花のけ
火お花の葉をまじりて

二刀
亀年
安茂
三宝

海老で鯛よの味

勝負付をとりて一枚 葉を

一賀

江戸甲

龜の甲お葉の葉代よ遠ひ
袴乃 葉をぬき葉を積ま
魚取りふ道中へ 出のけ

松産
弁士
形丸

夜宮の残葉

底抜けの春人若

玉尻

折句歌 丁七ハ

添へ乳を搾ひて立葉も放きぬ子
朝羽織紐をとりぬる花の葉

一霧
暮山

八六

明子立ッ火伸巨懐の母一才
集るも日向小獨乐乃神合せ
袖く白ひを嫁房も張る仕事
細ノ目も夢小令柑をみ出さ
集お引けるる初名のそけ酒
何の括ひもぬるみ入獨樂
揚々を盆怖り考の羽着子
袖一足初川さう子の肌抱ッ
る雲のひ中を水襟り一運今門

麻抱

飛石

野柳

德利

龜年

栲光

松翠

之巴

宗川

住吉丁

住吉丁

中八

赤岩の火鉢陽音お線武者
泣くお平ラ自道う不運ふ船
朔起を火も自尚能く子ひ船
有平を引くく自へ来う冬の蠅
そつと袖引く廊下の咄く探
影ら火鉢米屋一灰毎分

浪总

歌升

松橋

一象

冬朔

泰喜

月

ツサ

屋の戸張りをさする予加減
初夜一志を引く酒も雪の日

亀甲

德利

弁慶 飴をさけてく 玉田屋 丸島
勤ノ 盛りを下けて 花丸 島新

冠リ題 留

苗ノ 小葉を附本 小葉 籠ハ 籠
苗ノ 三葉 あれえ かん 一と 香の 寸 語 籠
苗ノ 多葉 色も 下 晩六 延 籠 柳 二 刀
苗ノ ねさ子 の 又 徳 小 沙 の 月 籠 抱 虎
苗ノ 針 不 目 つり と 妻 の 糸 切 籠 妻 志

折込題 文根

盆ノ 白根の 水 交て 火 籠 係 沈 産
盆ノ 交て 籠ハ 戸 籠 と 又 籠 針 安 胎
盆ノ 籠 や 根 引 の 松 又 寮 籠 法 五 束
盆ノ 籠 小 掛て 大 根 下 ス 籠 籠 法 慶 又
盆ノ 籠 て 坊 く 乃 く 連 も 根 ち おん 籠 松 花

五字題 横小車

盆ノ 籠 も 森 籠 福 好 て 春 窓
盆ノ 籠 口 も 捲 て 籠 籠 籠 田 張
盆ノ 籠 の 方 一 末 唐 を 持 て 籠 三 宝

日まの虎の皮

令入し驚りふ巾着を上弁

巾の傍

中沼

後羽の鹽を又付け

亀童

後々痛むと泣く所を

安茂

横車 通ひハメらぬ

情ふ付け縁一

玉住

折句歌 二ハハ

仕る中送りせて解ちの糸結り

桐花

首尾の能の晩朝ついで床をぬれ

之巴

邪不門掃く妻の痛く天遊りて

路燈

新造も葛取ふある年ツムハ

善心

七夜お祭り乳を付て袋一先

安茂

紫菀の二葉は利身色とる小皿

喜志

日 サラ

音お詠くくして 存るる

龜年

さび書あまひ掃も糸糸

龜甲

さ川と延ま配る云ッ梳

沈産

冠り歌 提

提て居る子の胎毒も減る業り
提て舟のうらたの今来と松魚
提て垂をゆく年の付と甘菜盆
提て分と量する古籠書さ次湯

徳利
茶又
五束
春志

折の歌 あり

あ方の泣く子と道理舟てん流
比乃へ用るゆる掛くあ大砂
あまひろけて子を完るにさくら
身も道成寺あ袖を穿小汐子

魚洗
麻枕
存世
かるり金鳥

五字歌 あり

中差乃口が回ころび
味増海持く澄ひふく
せ川ふをちりく廣の階子

冬期
森窓
二刀

日 此苦勞也

内く産ムの不乳母をそふり
形まぬ者の高ひふ通ひ
かゝるを費ひふおけ
息子も年中物づく病ひ

三宝
銀花
森茶
巻入

折上 年寄も乃付けし

出るる海

玉住

折上歌 カカト

二人釣り故をまゝ青ひふく花
瓜りの香うく反り橋ふさる小皿
後ろ付き合羽ふ嫁の年増し
極木の門下子の足も道と実
風鈴もみだしの蒸気夜の時を
振り出ふか減して次く七瓶の湯

龜年
飛羽
龜甲
松魚
之巴
飛石

ふり毛を借して冬より海り客

本丁 金星

空扇直まじり白草外庭暑し

沈輪

ふりの風懸る虫乃もまじり

飛羽

うけし麻をすまゝの浴り扇

草志

風と毛の浴衣磨く子の木絨形

松花

不自の対候あひこまじりぬ書

桃花

舟の巻に掛くもみりるたりの巻

松花

喧へおまひ約束乃原別

飛石

あつら煮をかくるもまじり年寄

二刀

風俗の瘦形ち能ひ子の増より
 浪馬
 夏豆や垣根子嫁の届うぬ子
 桂月
 打込中子元おもえり巻く
 歌伴
 運望の出かち鯨てりて不速白
 春志
 空扇そと飯巻の内うらこおおと子
 魚洗
 布巻小高く紙入をる麻の根
 我居
 空扇子小門入させる鶴乃鳥
 抛物
 不斗本にそのけ巻ふ終ひ鳥より
 存世

日はニヤハ

純斗り茶を引つ掛る映ハ不二
 春春
 仕舞ひ小書く子倦て七夕と二字
 春志
 暑ふ水の汲立巻の飯と巻て
 德利
 自換る物ひ巻ふ不噴掛ひの子
 好世
 ひと裏口消けても響も鳴れざる
 一賀
 休りの子止まて書立ち籠の湯
 二蝶
 尿いして捲る子鳩へ遠く致
 泉工
 獅子をくくと申折れの履く話
 三室
 紫菀もあつと人あて書の斗り梅
 梅内

八世

一八の嘆く家根終の路や穢のまゝ
あつくり深く子打影を不撥の海へ
あつくり覚悟を夫の身へ喚の者
あんきあんき黄も丸弾てとよひ胸
紗ても暑くうすうす何とぞ相織邪へ

日夕妹

誰の水さして涙のぬれ弾
七夕さあきや糸くも水成らん
溜息きあつくりてー仕看ふ積

五来
金星
善又
善山
沈雀

善山
研耕
中野

おれと今とささくは縁計
立之縁後のきつる袖くま
おく汐時ハ毎 極々 門下
立唄ハ作り金くもを芥子
建る戻風ふさくり脱く裾
お〜お志由んのねを押し入し
だお別てあいつくおは邪へあん子

冠り歌 送

送る字写を愛て子の下は子紙

一息
上川
且音
白濁
德利
沈亮
找居
横月

上の下
千曉

送りの細ききこく 鶯の声
送るやきこく 子守の五丁道と書
送る後三日と礼違ふ事と形
送る迎ふ方りの肩掛と世話
送る街立暑も 強くおはし纏
送られて降りる礼おえ泊らぬ子

妻父

上ノ丁 小塚

浅草下 如精

深川 橋端

世帯下 株木

松橋

日端

端の歩を突く事初令の形
端唄下をうり小多て助る礼

魚洗

サカカ下 よしく

端を五丁福安路一附る者

枚ノ表 浮浮

端の名をえて風呂敷の返にお

五塚

端一末く祝く子母の波釣籠

三巴

端一近く嫁の歩く雲ふ釣籠

枚ノ表 一の京丸

端折る後ふ具をしましき小舟

令星

端一懐掛け蓋あのおふ膳

上ノ丁 扇系

端一を袴袋浴衣と對の形

浴壇

端折る踊る地走りも宗不を

令星

折句歌 三末

未教ふ母の来たるはつ秩編
三孝の社も来社つるまきも 様
未だ形ふ志中とて時流も人の世
近ひ来るとあり二に交りぬ橋
之目技あるも来つ小喧喧面う
くもこれく来ると目のまぬふ志
女事の来つてん仕けるに世相
娘来つ格校袋をも三日あつと
来ると止まぬ身いと時流の流る肌

金多
松雀
英志
豊洗
株本
麻托
葉字
あ茂
中照

振りも来つ雅ナ事の子の三馬更

神田

英其

五字歌うろこ眼

内の用も斤仕翫ひ ぶ
何所のまよ昼日中一人の来
大門通りて薬権をえ付け
か〜りり乃仕掛よ編 玉
今ふ支つる葉漢をこのつゆ
響り響りの桐巻をえ付け
鉄炮を去るる見 附多

泰毒
秩峯
三巴
根花
阿耕
令住
吟多

山田

おろのゆふ薪く燭く福く

日 くらみ

世草 二

抜けの裏を内へ通ふされ

手裏をくし附の茶碗を改メ

通ひ小舟で油をえくらま

何を言ひてもぞせんよ

日 乙部合

舟ち人も巻くお後く

他の大根を湯用てえりあも

松代

安茂

田張

舟士

舟士

下足遠ひて坐敷一遣入り

ちりとも結ぶ福く床急き

鳴りえつてせんまゆり身をか

迎ひの門へ残りく戻り

山帰りを小声く語

尋常おのま

そんち中ツ

島入

香山

龜年

令任

乙室

玉任

加島衣八篇終

後篇 湯 雲

